2025 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部	教授	堀篤実
最終学歴	学　位	専門分野
金城学院大学人間生活学研究科博士課程人間生活学専攻修了	博士（医学、岐阜大学）、博士（学術、金城学院大学）	臨床心理学

Ⅰ　教育活動

〇理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学の建学の精神である、「真に信頼してことを任せうる人格の育成」にあげられているように、責任感があり真面目に物事に取り組む心身ともに健全な学生の育成を目指す。

【目標】

学生たちが、教育や保育の分野で必要とされる心理学の基礎知識や心理的支援に関する知識を身につけ、子どもを取り巻く様々な問題に対し、心理学の視点を持って対応できる能力を高めるようにする。同時に、自己理解・他者理解を深め、少子高齢化社会を支えて社会で活躍できる保育者・教育者を養成することを目標とする。

【方針】

授業において学生に対し各科目の専門性として必要な知識や技能を教授することに加え、授業時間外に、学生対応等を通して、教育をしていく。

【計画（方法）】

学生が各分野の知識や技術を習得でき、一人ひとりが成長感を感じられるわかりやすい授業を目指す。また、講義科目においては課題提出時のコメントを活用し、毎授業後、学生に振り返りを促すとともに教員の側からもコメントを記載し双方向授業を心がける。さらに、学生からのコメント等を活用し、学生が興味関心を持った内容や疑問を持った内容に関しては学びを深める授業内容を組み込み、授業を展開していく。演習科目については学生のコミュニケーション能力やソーシャルスキルを高められるよう、可能な限りグループワークを組み込み体験させる。また、専門演習では、学生が自ら問題意識をもってテーマを設定し、その解決方策を探求することに努めて研究を進め、最終的にの成果をまとめてプレゼンテーションできるようにする内容を取り入れ、さまざまなアクティブ・ラーニングを展開する。

〇担当科目（前期・後期）

（前期）

子ども家庭支援の心理学、発達心理学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

教育・保育相談、教育心理学、小児保健論、精神疾患とその治療、健康・医療心理学、
専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

〇教育方法の実践

各分野の知識や技術の習得を目指し、対面での授業を展開しつつ Teams の機能を活用し、学生が成長感・達成感を感じられる授業を目指した。講義科目においてはパワーポイントや独自の資料

を使用し教育的効果を高める授業を展開することによって、学生の学習意欲を刺激し興味・関心を高め知識を習得させるための努力をした。学生の理解度を高めるため、授業に身近な事例を取りあげたり DVD などの教材の導入をしたりした。また、グループディスカッションを効果的に取り入れ学生が自分の意見や考えを持ち表現することや自分とは違う意見や考えを受け入れるよう心がけた。専門演習Ⅰ及びⅡではカウンセリングの基礎知識や技術の習得のための演習を実施し、学生のカウンセリングマインドを高める指導をした。また、専門演習Ⅲ及びⅣでは個々の学生の研究テーマに沿った研究やそれを論文にまとめる指導をした。

〇作成した教科書・教材

授業ごとにオリジナルの教材を作成した。また、「発達心理学」、「子ども家庭支援の心理学」、「教育心理学」、「精神疾患とその治療」、「健康・医療心理学」においては振り返りシートを作成し、専門演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳではワークシート、振り返りシートを作成した。

〇自己評価

講義科目を中心に学生のニーズを感じとるため、オリジナルの「学習のあゆみ」という用紙を作成した。毎回、授業の始めにその日の内容の中の１つのトピックスについて考える時間を取り、学生の考えを記入させた。授業内でそのトピックスについて扱う時に授業前の自分の考えと比較させ学びを深めたり、課題に取り組み自分の言葉でまとめて記入させることで振り返りをさせたり、授業の最後に感想、意見、質問等を書いてもらったりした。それらに対して教員がコメントを書き加え次回の授業で返却をした。また、全体で共有したほうが良い意見や質問をやり取りしたときは授業内で取り扱い、他の学生とも共有し授業の内容を膨らませた。講義形式の授業については特に学生教員の双方向でのやり取りを心がけた。演習科目においてはグループワークを積極的に取り入れ、より具体的、体験的授業を試みた。また、専門演習Ⅰ、Ⅱの受講生には積極的にピアヘルパー筆記試験の対策となるべくカウンセリングマインドやピアサポート活動について指導をした。これらの結果、当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。

学生の授業評価において熱意や意欲をもって授業に取り組んでいたと評価された一方、PC やスマートフォン、タブレットを授業内でも授業外でもほとんど使用しなかったという回答が多かったことから、今後は学習の効果を高めることや主体的な学びを深める工夫を心掛け学生にとって学びの多い授業となるよう、さらなる授業研究をして改善していきたい。

Ⅱ　研究活動

〇研究課題

1．コミュニケーション能力及びカウンセリングの基礎知識を生かすことのできうる保育者、教育者の養成

2．表現に関する学びが幸福感や自己肯定感、レジリエンスに及ぼす影響に関する研究

〇目標・計画

【目標】

＊研究課題１

・学生のコミュニケーション能力を高める要因や背景を探ることにより、よりよい人間関係を築き他者から信頼される人格を形成できるようにする。

・可能な限り、地域諸機関での経験学習に参加できるような場を設定し、学生の成長・発達を促す。

・カウンセリングの基礎知識や技術を習得することにより、保育や教育の様々な場面で援助・支援することができるようにする。

＊研究課題２

・表現力を育成する体験と幸福感や自己肯定感、レジリエンスの関係について解明し、学生の幸福感や自己肯定感、レジリエンスを高める。

【計画】

＊研究課題１

これまで実施してきたコミュニケーション能力の向上に関与する要因の検討を継続するとともに、保護者の様々なニーズや相談に対応できる保育者および教育者になるために、学生のソーシャルスキルについて検討する。ピアヘルピングに関する資格取得を希望する学生に、カウンセリングの基礎知識やカウンセリングマインドについて勉強会を開催し、資格取得を支援する。また、学生のカウンセリングマインドを高める支援をすると同時に、カウンセリングの基礎について学んだ学生のソーシャルスキルについて学習の前後で調査を実施し、ソーシャルスキルの修得やその傾向を分析する。これらの結果とカウンセリングの基礎知識を身につけピアヘルパーの資格を取得した学生のピアサポート活動の実践取り組みなどを研究としてまとめ、保育や教育、心理関係の学会や学会誌に発表する。

＊研究課題２

保育者や教育者を目指す学生が主体的かつ協働的にグループワークやディスカッションに取り組み、演劇の創作体験をすることで、表現力に関する自己認知や自己肯定感やレジリエンスにどのような影響を及ぼすのかについて昨年度に引き続きデータを収集し、検討をする。これらの結果をまとめ、日本教育心理学会で発表をするとともに論文にまとめ関連する学術誌等に発表する。

〇2018 年 4 月から 2026 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

・白井克尚・柿原聖治・鈴木順子・堀建治・堀篤実「保幼小接続・連携を担う保育士と教員養成の実践―教育学部・総合演習における森林環境教育を目指したプロジェクト型学習を通じて―」『東邦学誌』第 52 巻 1 号、2023 年、pp.47-63

・堀篤実、肥田幸子、鈴木美樹江「就業困難が予測される学生の支援のための就業力尺度作成の試み」、健康レクリエーション研究、第 16 巻、2020、1-12

（学会発表）

・堀篤実「教職・保育職志望学生の表現力の学びの効果に関する一考察　―主観的幸福感,レジリエンスの視点から―」第 67 回日本教育心理学会総会 2025 年 10 月 12 日

・堀篤実「教職・保育職志望学生の表現力の学びの効果に関する一考察（自己肯定感，レジリエンスの視点から）」第 10 回日本レクリエーション学会大会 2025 年 3 月 1 日

・堀篤実「教職・保育職志望学生の表現の学びと自己肯定感、レジリエンスに関する一考察」第 66 回日本教育心理学会総会 2024 年 9 月 16 日

・白井克尚、柿原聖治、鈴木順子、堀建治、堀篤実「幼小接続を見据えた森林環境教育を担う教員の養成 ―教育学部総合演習におけるﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸを通じて―」初等教育カリキュラム学会第 7 回大会 2023 年 1 月 8 日

（特許）

特になし

（その他）

特になし

〇科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

〇所属学会

日本心理臨床学会、日本発達心理学会、日本精神分析学会、日本教育カウンセリング学会、日本教育心理学会、日本学生相談学会、日本健康レクリエーション学会、日本保育学会

〇自己評価

子どもたちやその家族のニーズに対応できる保育者・教育者を養成するため、学生の必要とされるソーシャルスキルやキャリア形成について継続的に調査しコミュニケーション能力及びカウンセリングマインドをもった保育者・教育者の養成とキャリア形成に取り組んできた。また、ピアヘルパーの資格取得を希望する学生に対し資格取得に向けた対策を実施するとともに学び前後の学生の変化について調査をしてきた。次年度はカウンセリングの基礎知識を身につけ資格を取得した学生がこれらを活かし実践に繋げていけるよう検討を重ね、関連学会で発表していきたい。

また、表現力の育成と主観的幸福感、レジリエンスの関係については、グループワークやディスカッションを通して、表現力の修得や演劇による表現の経験をすることにより、表現力に関する自己認知や主観的幸福感やレジリエンスにもたらす影響を検討することを目的とし、研究を進めている。表現系科目の充実や感性を磨く活動の充実、表現力豊かな子どもを育む保育者・教育者の養成を目指す本学の独自科目である「総合表現技術」の授業に参加する学生を対象とし、その授業に参加する前と後にアンケート調査を実施し、データをまとめ分析した結果を、第 67 回日本教育心理学会総会で発表した。これまでに実施した調査も含めて論文にまとめ関連学会誌で発表に向けて準備を進めているところである。

これらより当初の目標・計画については、概ね目標を達成することができた。

Ⅲ　大学運営

〇目標・計画

【目標】

学部・所属委員会や学生相談に関与し、役割を果たすことを目標とすると同時に大学運営に貢献する。

【計画】

学部執行部として、教育学部の運営や学生の教育に積極的に関わり、「真に信頼してことを任せうる人格の育成」に努めるとともに、学生たちが自ら考え、互いに学び合える環境づくりに努める。委員会関連では、積極的に委員会活動を実施していく。また、各委員会では、委員の一人として、自覚と責任を持ち、大学運営に関わっていく。

〇学内委員等

教育学部執行部、保健・学生相談センター運営委員会、自己点検・評価委員会、総務委員会、幼小教職課程・保育士養成部会

〇自己評価

教育学部執行部の一員として，学部長を中心とした円滑な学部運営に努力した。また自己点検・評価委員会委員長として委員会活動が円滑に運営されるように努めた。この他、保健・学生相談センター運営委員会、総務委員会、人事委員会、幼小教職課程・保育士養成部会では委員長、部会長主導のもと委員の一人として、活動に参加し貢献した。

以上のことから概ね目標を達成することができた。

Ⅳ　社会貢献

〇目標・計画

【目標】

地域社会の人々のメンタルヘルスの向上や発達障害の研究が広く社会に役立つように臨床や啓発活動に努める。また、地域に対する本学のクレドに基づき、地域との連携・貢献を目指していく。

【計画】

臨床に加えて講演などの社会啓発活動を積極的に行い地域に考古研していく。発達障児・者のグループ活動にディレクターとしてかかわり障害児・者を支援するとともに支援者の養成にもかかわっていく。

〇学会活動等

日本健康レクリエーション学会理事　2016 年 11 月～現在

日本健康レクリエーション学会査読者　2019 年 4 月～現在

〇地域連携・社会貢献等

NPO 法人アスペ・エルデの会　専門協力家

名東生涯学習センター主催令和 7 年度女性セミナー　第 4 回講師　2025 年 6 月

〇自己評価

日本健康レクリエーション学会の理事ならびに査読者として学会の発展に貢献した。また、NPO 法人アスペ・エルデの会専門協力家として発達障がいの子どもたちとその家族の支援に努めた。さらに、名東生涯学習センター主催の女性セミナーにもかかわることができた。これらの活動により概ね目標を達成することができた。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

最新の技術や知識を習得するため、積極的に臨床心理学会や学生相談学会、発達心理学会、教育心理学会など心理関連の学会の研修会や学会発表に参加をしていく。また、教育相談や発達心理学に活かすべく心理療法を学ぶため臨床心理士の定例研修会や心理相談の研修会に参加していく。

さらに臨床家としての技術を高めるために、継続的に学んでいる精神分析をはじめとする心理臨床に関するセミナーに積極的に参加をする。これらから得られるものを学生に教授し、対人関係力や探求心などの能力を有した学生を養成するとともに、自分の習得した知識や技術をより確実なものとする。

Ⅵ　総括

今年度は教育学部執行部として学部長をはじめ学部の先生方、職員の方々に支えていただきなが

ら学内業務や講義の円滑な遂行を心掛けた。授業においては改善点も多いものの授業への熱意等が認められ優秀教員の表彰を拝受することができた。

教員としての研究テーマは教育・保育職における子どもおよび保護者の心理的支援である。これは次世代育成支援の一つであり、子どもたちの未来へつながる重要な研究であると考えている。また、表現力豊かな教育者保育者養成の取り組みが学生に与える影響を検討し、これについては、日本教育心理学会において学会発表を行った。2026 年度以降はこれらの研究および活動を継続し分析を進め活字にまとめていきたいと考えている。それら成果を学内の授業や社会に貢献することで還元し、大学・学部、学園の飛躍のために尽力してきたい。

以　上